「JGAゴルフジャーナル」 Dec. 2013 Vol.94

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGA Golf Journal

公益財団法人日本ゴルフ協会

日本のゴルフが、日本のチカラに。
Green Tee Charity

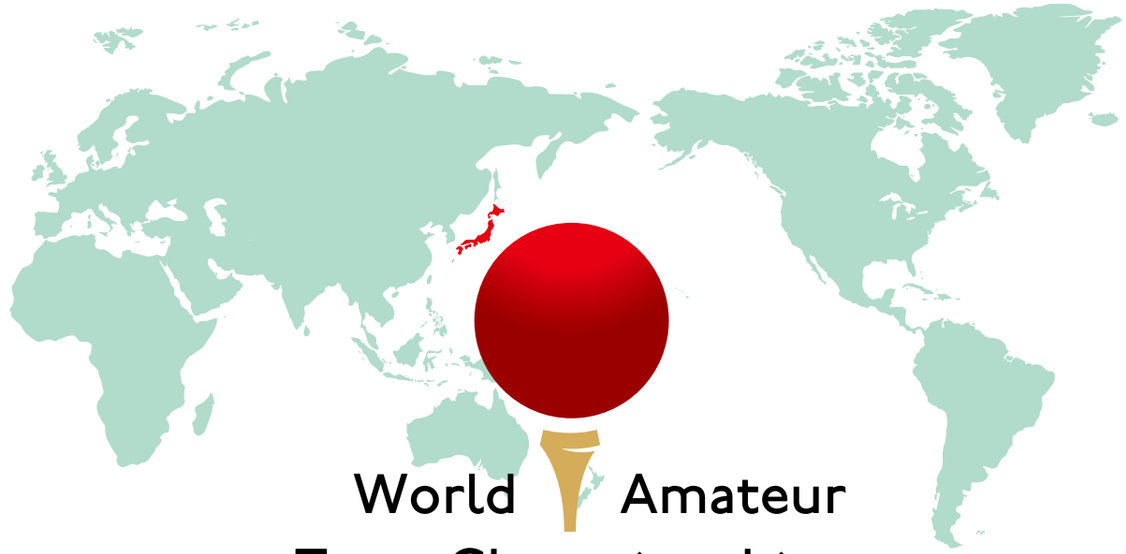
52年ぶりの日本開催
世界アマチュアゴルフチーム選手権

1958年にセントアンドリュースで産声をあげた世界アマチュアゴルフチーム選手権（世界女子アマチュアゴルフチーム選手権は1964年から開催）。2年に一度開かれる同選手権の2014年大会は、日本での開催となる。
舞台は長野県の軽井沢72ゴルフ東・入山と押立両コース。
日本開催は、第3回大会（1962年）の静岡県、川奈ホテルゴルフコース・富士コース以来52年ぶりとなる。
過去に日本チームは1984年大会（香港）で優勝したほか3度の2位（1974年・1976年・1982年）、女子チームは4度の4位入賞の成績を残している。
2度目の日本開催を機に同選手権の歴史を振り返りつつ、日本開催の意味、そして見どころなどを探っていきたい。

聞き手・構成：JGAオフィシャルライター　塩原義雄

『アイゼンハワートロフィー』と『エスピリトサントトロフィー』

世界アマチュアゴルフチーム選手権の生みの親が日本人であったことは、あまり知られていないようだ。1957年に埼玉県の霞ヶ関カンツリー倶楽部で行われたカナダカップ（現ワールドカップ）の際、当時JGA副会長だった野村駿吉氏が、USGAにアマチュアの日米対抗戦開催を提案したのが、きっかけだった。ここから話は大きく広がり、R&Aも賛同して「両国対抗」ではなく、門戸を世界に広げた世界アマチュアゴルフチーム選手権へと発展していった。
1958年には世界35カ国がワシントンD.Cに集い、うち32カ国によってワールド・アマチュア・ゴルフ・カウンシル（WAGC＝現IGF）が設立され、同年10月には、早くも第1回大会がセントアンドリュース・オールドコースで行われた。大会の呼び名は、当時の米国大統領D・アイゼンハワーから優勝カップを寄贈されたことで『アイゼンハワートロフィー』と名付けられた。
一方、女子は、アイゼンハワートロフィー創始から7年後の1964年（昭和39年）に第1回大会が開催され、ロシア帝国の由緒あるカップをポルトガルのSilvia Espirito Santo女史が提供されたことから『エスピリトサントトロフィー』と呼ばれ、今日まで続けられている。男女とも3人が1チームとなり、4日間各日上位2選手のスコア合計で競われる。



過去の成績一覧

	開催地	男子優勝チーム	女子優勝チーム
1958	スコットランド	オーストラリア	
1960	アメリカ	アメリカ	
1962	日本	アメリカ	
1964	男子：イタリア／女子：フランス	イギリス／アイルランド	フランス
1966	メキシコ	オーストラリア	アメリカ
1968	オーストラリア	アメリカ	アメリカ
1970	スペイン	アメリカ	アメリカ
1972	アルゼンチン	アメリカ	アメリカ
1974	ドミニカ	アメリカ	アメリカ
1976	ポルトガル	イギリス／アイルランド	アメリカ
1978	フィージー	アメリカ	オーストラリア
1980	アメリカ	アメリカ	アメリカ
1982	スイス	アメリカ	アメリカ
1984	香港	日本	アメリカ

	開催地	男子優勝チーム	女子優勝チーム
1986	ベネズエラ	カナダ	スペイン
1988	スウェーデン	イギリス／アイルランド	アメリカ
1990	ニュージーランド	スウェーデン	アメリカ
1992	カナダ	ニュージーランド	スペイン
1994	フランス	アメリカ	アメリカ
1996	フィリピン	オーストラリア	韓国
1998	チリ	イギリス／アイルランド	アメリカ
2000	ドイツ	アメリカ	フランス
2002	マレーシア	アメリカ	オーストラリア
2004	プエルトリコ	アメリカ	スウェーデン
2006	南アフリカ	オランダ	南アフリカ
2008	オーストラリア	スコットランド	スウェーデン
2010	アルゼンチン	フランス	韓国
2012	トルコ	アメリカ	韓国

ニクラウスもタイガーもミケルソンも
宮里優作、松山英樹も
アニカもヤニ・ツェンもポーラも
宮里藍、宮里美香、森田理香子も…

第1回大会の優勝チームはオーストラリアで、個人優勝も果たしたブルース・デブリンが牽引して優勝候補といわれていた米国を下しての戴冠だった。米国メリオンGCで開催された第2回大会では、あのジャック・ニクラウスが4日間を19アンダーパーの269で圧倒的な強さでチームを引っ張り、母国でのリベンジを果たした。

祖国の名誉と誇りをかけての戦い。過去の大会出場選手には、ニック・プライス、フィル・ミケルソン、タイガー・ウッズはじめ女子のアニカ・ソレンスタム、スーザン・ペターソン、ポーラ・クリーマー、ヤニ・ツェンら、その後プロ転向して世界のトッププロに駆け上がっていくビッグネームが並ぶ。日本チームの歴代メンバーには丸山茂樹、片山晋呉、宮里優作、池田勇太、松山英樹らの名前がある。女子では宮里藍、宮里美香、森田理香子らが日の丸を背負って戦った。

トルコで開催された前回大会には、男子72チーム、女子53チームが出場し、男子はアメリカ、女子は韓国が優勝した。女子の個人優勝は、リディア・コだった。日本は男子が9位タイ、女子は10位という成績だった。

大会名

Espirito Santo Trophy
Women's World Amateur Team Championship
エスピリトサント・トロフィー
世界女子アマチュアゴルフチーム選手権

Eisenhower Trophy
World Amateur Team Championship
アイゼンハワー・トロフィー
世界アマチュアゴルフチーム選手権

主催

International Golf Federation（IGF）
国際ゴルフ連盟

主管

公益財団法人 日本ゴルフ協会（JGA）

後援

文部科学省、外務省、観光庁、長野県、軽井沢町、関東ゴルフ連盟、長野県ゴルフ協会、信濃毎日新聞社

開催期間

女子	指定練習日	2014年 9月 1日～ 9月 2日
	選手権	2014年 9月 3日～ 9月 6日
男子	指定練習日	2014年 9月 8日～ 9月 9日
	選手権	2014年 9月10日～ 9月13日

開催場所

軽井沢72ゴルフ　東（入山・押立）

世界アマチュアゴルフチーム選手権に出場して…

● 池田勇太（2004、2006年大会出場）

「とにかくチームとしてひとつでも上にいこうという気持ちでやっていたという思い出があります。チーム戦でのコミュニケーションの大切さも痛感しました。自分にとっては、出場することで若いうちから国際経験を積ませてもらい、いろいろな国、地域でいつもと違うコースを知り、技術の幅も広がったと思っています」

● 小平　智（2010年大会出場）

「アマチュアの試合では一番大きな大会で、自分の意識も違う大会でした。自分のときには2つのコースを交互に4日間プレーするという普段の日本では経験できないような試合形式でしたので、いつもと違った対応力を求められました。そのときの対応力が、今の自分に役立っていると思います。来年、日本がホスト国となってやるからには、優勝目指して頑張ってもらいたいし、意識を高く持ってプレーすることを願っています」

● 松山英樹（2010、2012年大会出場）

「世界のトップ選手たちとプレーすることができて、貴重な経験になりました。アマチュア時代に、この世界アマチュアゴルフチーム選手権をはじめとする大きな国際大会に出場させてもらった経験が、今、プロになってからも活きています」

松山英樹（2012年大会）

左から伊藤勇気、池田勇太、宇佐美祐樹（2006年大会）

左から宮里美香、森田理香子、原江里菜（2006年大会）

● 宮里　藍（2002年大会出場）

「とにかくそれまで出場したアマチュアの試合の中ででも規模が大きく、大勢の外国人選手がいることに緊張したのを覚えています。会場には沢山の国旗がはためき、それぞれの国のユニフォームが、とても格好よく見えて、自分が日本を代表して出場することを同時に実感しました。この大会に出場して海外選手のレベルの高さを痛感させられたのは悔しいですが、正直な感想でした。世界アマチュアゴルフチーム選手権の経験は、間違いなく、自分が世界を目指すきっかけのひとつになりました。チーム6位という結果が悔しくて、大会が終わると、いつかまた世界というフィールドで戦いたいという思いが膨らんでいました。2014年は、52年ぶりに日本開催になります。ホスト国チームとして出場する選手たちには、ぜひ頑張ってもらいたいと思います。同時に、大勢の外国人選手、関係者が日本を知るきっかけになるということも日本にとってとても大きなことだと思います」

● 宮里美香（2004、2006、2008大会出場）

「自分にとっては中学3年のプエルトリコでの大会が初出場でした。初めて尽くしの戸惑いと時差ボケが大変だったことを覚えています。また、ポーラ・クリーマーやヤニ・ツェンという現在一緒に世界で戦っている選手と出会ったのもプエルトリコ大会で、想像以上に大きな大会だということを感じました。その後さらに2大会に出場させていただき、小さいころからの夢だった世界の舞台で戦いたいという思いが、大きく膨らみました。自分がどうなりたいのか、どうありたいのか。それを鮮明にイメージさせてくれる大会でした」

● 森田理香子（2006年大会出場）

「世界アマに出場したことで、今の自分があります。世界のトッププレーヤーの強さを目の当たりにして、刺激を大きく受けたことは間違いありません。2014年の世界アマに出場する選手は、自国開催ということで、日本にとって有利になりますしチーム戦としてメンバーが協力し合うことが大事だと思います。日本代表に選ばれた選手はプレッシャーも感じると思いますが、周りのサポートもあるので伸び伸びプレーしてもらい、力を出し切ってもらいたいと思います」

川田太三JGA常務理事インタビュー
（世界アマチュアゴルフチーム選手権開催対策本部副本部長）

世界アマチュアゴルフチーム選手権の創設に関わった野村駿吉氏の逸話や本選手権開催にあたっての意気込みを語る川田副本部長

野村駿吉氏の功績を忘れない

── 52年ぶりの日本開催に漕ぎ着けるまでのいきさつをお話しいただけますか?

川田　「その前に、どうしても話しておきたいことがあります。それは、世界アマチュアゴルフチーム選手権の生みの親ともいうべき野村駿吉さんのことです。1957年に霞ヶ関（カンツリー倶楽部）で行われたカナダカップ（現ワールドカップ）の際に当時JGAの副会長だった野村さんが日米アマチュア対抗戦を提案したことが、世界アマチュアゴルフチーム選手権開催に発展していったことは知られていると思います。カナダカップの日本開催実現に奔走したのも、野村さんでした。カナダカップに続いて日米アマチュア対抗戦の提案でしたが、その実現にあたって野村さんがどんな活動を続けたのかまでは、あまり知られていないのではないでしょうか。アメリカ留学経験もあり、アメリカでのビジネス経験もある野村さんは、現地の財界関係者やゴルフ関係者にも知己が大勢いらっしゃいました。霞ヶ関での提案の後、カナダカップが無事に終了したことのお礼と、報告を兼ねて11月に渡米しています。そして、改めてUSGAに対抗戦の話を切り出しました。ここから話は大きく発展していきます。それなら二か国の対抗戦ではなく、もっと規模を広げて世界アマチュアチーム選手権のようなものにできないだろうか、という流れになったのですね。そして、R&Aにも呼び掛けるとすぐに賛同をとりつけ、各国のゴルフ連盟、協会といったところに、この計画を持ちかけました。発起人のひとりという立場で、野村さんはUSGA、R&A関係者と共に各国に呼びかけています。翌1958年には呼び掛けに応じた35カ国がワシントンD.Cに集まり、うち32カ国によってWAGC（現IGF）が設立されます。そして世界アマチュアゴルフチーム選手権実現に向けて急加速していきました。USGAでは当時の会長がホワイトハウスでアイゼンハワー大統領と面談し、大会趣旨を説明してアイゼンハワーカップを贈呈されます。さらに大会会場もセントアンドリュース・オールドコースを第1回大会の舞台として取決め、10月には開催に漕ぎ着けています。提案してから半年足らずでWAGCを設立させ、さらに半年たらずで第1回大会開催ですから、そのダイナミックな動きとスピードには、本当に驚かされます。いたのです、こういう人が」

── 野村さんといえば、世界アマチュアゴルフチーム選手権開催後に、欧米とアジアの力量差を埋めることを目的としたアジア太平洋アマチュアゴルフチーム選手権を1962年に立ち上げ、ノムラカップを贈呈しました。このノムラカップは今やアジア太平洋地域最大の男子アマチュアチーム選手権に発展しましたね

川田　「そう、はじめは日本、台湾、フィリピンぐらいだったけど、いまでは規模も大きく、出場チームも増えて、アマチュアチーム戦としては世界アマに準ずる大会に成長しています。これも野村さんの多大な功績の中のひとつといっていいでしょうね」

2013年8月19日に開催された記者会見では世界最大規模の本選手権の概要や過去4大会の世界アマのVTRを紹介し、52年ぶりの日本開催に向けて、機運を高めた。

52年ぶり２度目の日本開催決定までのいきさつ

── さて、52年ぶり2度目の日本開催ですが…

川田　「それが、最初の質問でしたよね。英国、アメリカ、に次いでの第3回大会が日本でした。これは、大会スタートのいきさつ、流れから、自然な成り行きだったと思います。その後イタリア、メキシコ、オーストラリア、スペイン…と、開催国は世界に広がっていきました。前回のトルコ大会まで、開催国は実に25カ国にのぼります。28回大会までに2度開催されたのはアメリカとオーストラリアだけです。開催国も、おおよそ世界を一巡りして二巡目に入ったのかな…というタイミングでした。そこで、2010年のアルゼンチン大会の際に、日本として2度目の開催に立候補しました。対抗は、これまた2度目の開催を目指したフィジーでしたが、フィジーが取りやめたため無投票で日本開催が決定しました。

ゴルフの精神、楽しみを世界に広める

── 世界アマチュアゴルフチーム選手権と、その開催には、どんな意味があるのでしょう?

川田　「野村さんの提案から広がった大会ですが、世界規模にしようと決めた裏には、ゴルフの普及があったのだと思います。ゴルフの精神も含めて、この素晴らしいスポーツをできるだけ多くの国の人々に広め、楽しんでもらいたい。同時に、ゴルフを通して国際交流を図る。そういった意図もあったように思います。さらに開催国となることで、自分の国を知ってもらう。そんな機会になることも期待できると思います。ゴルファーの育成、強化にもつながるでしょう。実際、日本の例を出すなら、1984年大会で日本チームが優勝したのを機に、ジャパンナショナルチームの制度が発足し、育成、強化がより一層図られるようになりました。こうした動きは、世界各国で広がっています。世界の実力を知ることで、各国がレベルアップを目指すようになります」

軽井沢72での開催にあたって

── 開催コース選びは、順調に進められたのでしょうか?

川田　「これがまた悩みの種でした。なにしろ大会規模が膨らみ、前回のトルコでは男子72チーム、女子53チームで、選手だけでもこの3倍の人数で、そこにチームリーダーや各国関係者を含めると、膨大な人数になります。それだけの人数を収容でき、なおかつ国際会議などの会場も用意するとなると、会場の施設も余程の規模でないと運営できません。空港からの移動手段にも便利のいい場所である必要があります。全ての条件を考えると、それを満たしているのは軽井沢72しかあるまい、ということで相談し、了解していただくことができました。ハイシーズンであるにも拘わらず、指定練習日も含めると13日間も大会会場として利用させていただけることに深く感謝申し上げたいですね」

── キャディーの問題もあったのではありませんか?

川田　「ええ、これもいろいろありました。なにしろ、出場選手が多いので、手配しきれるかどうか…。最終的に日本開催では、セルフプレーに決まりました。大会規模が大きくなりすぎたのかな…、今後は地域での予選会などを設けて本大会出場チームをもう少し絞り込む必要があるな…とも思っています。出場チーム数などは国際会議で協議してもらおうとも思っています。ですから、これだけの規模の大会は、日本開催が最後になる可能性があります」

── コースセッティングは、どのようにしていく計画ですか?

川田　「詳細についてはこれからですが、出場チームのレベルには、かなりの差がありますので、どこら辺を基準にするか難しいところです。ただ、押立コースの18番は男子777ヤード、女子666ヤードのパー6となることが濃厚で、世界規模の大会では珍しいホールとなりそうです。コースのよさ、特長を生かして必要なら手を加える。それが基本スタンスです」

── まだまだ準備は大変でしょうが、2020年の東京オリンピック開催も念頭におきながら、“日本でやってよかった”と満足していただける大会になることを願っています。ありがとうございました。

軽井沢72ゴルフの紹介

「2014世界アマチュアゴルフチーム選手権」開催にあたり

世界アマチュアゴルフチーム選手権開催に向けて整備が進む軽井沢72ゴルフ東コース（2014年7月2日（水）新クラブハウスオープン予定）

1958年より2年に1回開催されております歴史ある「世界アマチュアゴルフチーム選手権」が来年、2014年9月に長野県・軽井沢町を舞台に、国内では52年ぶりに開催されます。

世界各国のトップレベルの男女アマチュアゴルファーが軽井沢に集結し「世界一」の座を競う本大会が、自然豊かな国内最大級のホール数を保有する「軽井沢72ゴルフ」（108H）が決戦の舞台として決定したことを大変誇りに思うとともに、大会を成功に導くために会場側として、しっかりと受入準備を進めていかなくてはならないと、改めて気持ちが引き締まる思いでございます。

また、大会期間中は世界各国より、私どもの施設に延べで約1,000名の選手・役員・関係者をお迎えすることになります。

この機会に、地元信州フードを中心とした特産品の提供や軽井沢町をはじめ長野県内の観光スポットを積極的にご案内し、世界各国に向けて長野県、軽井沢町の魅力と軽井沢プリンスホテルの「おもてなし」を発信していきたいと考えております。

大会を終え母国に帰った選手・関係者の皆さんが、再び長野県、軽井沢町を訪れていただけるように、関係各方面の皆さんと連携・協力をして本大会を盛り上げ、成功裏に導きたいと強く考えております。本番まであと9ヶ月、ひき続き皆さまのご協力ご支援をお願い申し上げます。

軽井沢プリンスホテル 軽井沢ゴルフ・スキー総支配人
小山 正彦

2014年世界アマチュアゴルフチーム選手権 日本開催に関する協賛金・寄附金のお願い

JGAでは日頃からゴルフに対してご理解を頂いている皆様に日本大会を成功に導くために協賛金・寄附金を広く募集しております。皆様のご支援をお願い申し上げます

法人様ご支援プラン

PLATINUM

プラチナサポーター料　一口 300万円（税別）

- 会場内社名表記一覧看板（大）
- プログラム広告
- JGAホームページ内の本大会特別サイト内での社名掲載
- 大会名呼称使用権
- ガラディナー（特別ディナー）へのご招待2名
- 大会会場で軽食券・飲み物券進呈（各日6名分）
- 大会記念品贈呈

GOLD

ゴールドサポーター料　一口 100万円（税別）

- 会場内社名表記一覧看板（中）
- プログラム内社名表記
- JGAホームページ内の本大会特別サイト内での社名掲載
- 大会会場で軽食券・飲み物券進呈（各日4名分）
- 大会記念品贈呈

SILVER

シルバーサポーター料　一口 30万円（税別）

- 会場内社名、氏名表記一覧看板（小）
- プログラム内社名表記
- JGAホームページ内の本大会特別サイト内での社名掲載
- 大会会場で軽食券・飲み物券進呈（各日2名分）
- 大会記念品贈呈

個人様ご支援プラン

EMERALD

エメラルドサポーター料　一口 100万円

- JGAホームページ内の本大会特別サイト内での社名、氏名掲載
- 大会会場で軽食券・飲み物券進呈（各日4名分）
- 大会記念品贈呈

SAPPHIRE

サファイアサポーター料　一口 10万円

- JGAホームページ内の本大会特別サイト内での社名、氏名掲載
- 大会会場で軽食券・飲み物券進呈（各日2名分）
- 大会記念品贈呈

PEARL

パールサポーター料　個人限定　一口 1万円

- JGAホームページ内の本大会特別サイト内での氏名掲載
- 大会記念品贈呈

ご支援を頂けます場合は、JGAホームページよりお手続きくださいますようお願い申し上げます。

2014年ゴルフ規則裁定集の主な変更点の解説

2014年はゴルフ規則裁定集の改訂年です。
ゴルフ規則裁定集はゴルフ規則の適用事例や解釈が掲載されているもので、定義上の規則でもあり、2年に1度改訂されます。
2014年はゴルフ規則そのものの改訂は行われないので（ゴルフ規則の次の改訂は2016年です）、2012-13ゴルフ規則裁定集から大きな改訂が行われているわけではありませんが、新しい裁定が3、改訂された裁定が59、番号を変更した裁定が1、削除された裁定が24あり、主なものをここで解説いたします。
なお、解説は簡易的なものですので、ゴルフ規則裁定集の該当する裁定も参照することをお勧めいたします。
書籍としての販売は2月初旬を予定しています。

【新裁定】

14-3/18　気象情報に多機能機器でアクセスする

規則14-3はプレーに影響する状況を計測するために人工の機器を使用することを禁止していますが、気象台等によって発表されている情報をアプリやインターネットを通じて知ることはこの規則違反とはならないとの解釈が示されました。このような行為はプレーヤーが状況を「計測」していることにはならないからです。

【改訂裁定】

14-3/4　ラウンド中のコンパスの使用

旧裁定ではラウンド中に方位を知るためにコンパスを使用することは規則14-3の違反となると規定していましたが、この裁定は改訂され、コンパスの使用を認めることになりました。
改訂された裁定では、コンパスは方向の情報を提供するだけであり、変化する状況を計測しているわけではないし、プレーの援助となるようなものではないとの解釈を示しています。

25-2/0.5　どの時点で地面にくい込んだことになるのか

規則25-2に規定する「球が地面にくい込んだ」という状態について図を使用して解説するようになりました。球が地面にくい込んだとみなされるためには、球が落下したことによってできた自分のピッチマークに入り、球の一部が地表面の下にあるという要件を満たす必要があることが規定されています。

くい込んでいる　くい込んでいる　くい込んでいない

27-2a/1.5　球を「探しに出かける」とは

暫定球のプレーを認める規則27-2は時間節約が主旨であるので、球を探しにでかける前に暫定球をプレーしなければならない旨を規定しています。この裁定は球を「探しに出かける」の解釈をさらに明確に規定するために改訂されました。裁定では初めの球があると思われる場所に向かって歩いたとしても、そこから短い距離を戻ることが時間節約となると考えられる範囲であれば、短い距離を進んだことは認められるとの解釈が示されています。

4-1/1　2010年1月1日施行の溝とパンチマークの仕様とその競技の条件

2010年1月1日に施行された溝とパンチマークの規則に適合したクラブを使用しなければならない旨の競技の条件はすでにプロツアー競技で採用されていますが、2014年1月1日以降はエキスパートプレーヤーが参加するアマチュア競技においてもこの条件を採用するケースがあるため、この条件の採用はあくまでもエキスパートプレーヤーが参加する競技においてのみ勧められることを強調するとともに、一般のアマチュア競技においてこの条件を採用する必要はなく、少なくとも2024年までは2010年1月1日より前に製造され当時の規則に適合したクラブの使用は認められることを明記しました。この裁定の推奨に基づき、2014年度より以下のJGA主催競技では、この条件を採用します（詳細はJGA ホームページ参照）。

■2014年からクラブフェースの溝の新しい規則に適合したクラブに制限するJGA主催競技

日本オープンゴルフ選手権競技（本選・最終予選・一次予選）
日本女子オープンゴルフ選手権競技（本選・予選）
日本シニアオープンゴルフ選手権競技（本選・予選）
アジアパシフィックオープンゴルフチャンピオンシップダイヤモンドカップゴルフ
日本女子シニアゴルフ選手権競技（予選・本選）
日本女子アマチュアゴルフ選手権競技
日本アマチュアゴルフ選手権競技
日本ジュニアゴルフ選手権競技
日本学生ゴルフ選手権競技
日本女子学生ゴルフ選手権競技
日本シニアゴルフ選手権競技
日本ミッドシニアゴルフ選手権競技
日本グランドシニアゴルフ選手権競技
日本ミッドアマチュアゴルフ選手権競技
日本女子ミッドアマチュアゴルフ選手権競技
国民体育大会（本大会、ブロック大会、都道府県大会）
日本スポーツマスターズ

これらの競技に参加する予定の方は、使用する予定のクラブが新しい規則に適合しているか、ご自身の責任においてクラブメーカーに確認したうえで参加されることをお勧めいたします。

※J-sys選手権には適用されません。地区連盟など他の団体が主催する競技については、それぞれの主催者にお問い合わせください。